

金属部会長便り(2024年2月号)2024年 2月1日発行(第31号) 田中和明個人の意見・感想で部会の総意ではありません。

## 部会長便り第31号

### 1 直近の活動

- 1月7日(日) 幹事会 (2024年1月)
- 1月11日(木) 技術士会新年会、賀詞交換会2024
- 1月21日(日) 「企業内技術士勉強会 (11回目)」
- 1月21日(日)金属部会執行役リアル会
- 1月27日(土) 吉武記念講演会・65周年記念大会

### 2 今後の活動予定(直近1ヶ月分)

- 2月4日(日) 幹事会 (2024年2月)
- 2月11日(日)金属部会CPD技術セミナー11 「技術者倫理」
- 2月17日(土)YES-Metals!
- 2月18日(日) 「企業内技術士勉強会 (11回目)」
- 2月25日(土) 定例部会 (2月) 埼玉担当。

### 3 部会四方山

▶65周年記念誌が完成した。出来上がってみると148ページにもなり、厚みもビッグなら印刷代もビッグになった。でも、「大丈夫、はいてます、パンツ!」ではなく、「入ってます、貯金!」銀行に部会の貯金がきっちり増えてます。厚みも印刷代もビッグだが、行事参加者もビッグなためだ。でも、一昨年より参加者が88名増えただけで、1600人には12名とどかなかった。数を競うのは今年までにして、来年からはもう少し「笑いが取れる表彰」を目指したいと思う。表彰基準が明確でないとの指摘も一部にはあるが、基準は常に変わるもの。部会活動で頑張ってくれた人に光を当てたいとの思いは変わらない。▶冊子は、オンラインでダウンロードできるようにしている。まだ、参加者特典の時期なので、津々浦々に解放できるのは、そうですね、部会長会議で他部会に配り、地域本部や関東支部に行き渡ったところで解放するので、今しばらくお待ちください。2月中旬です。どうしても、この瞬間欲しい人は、お便り箱に投書ください。▶この冊子は、「入念に討議を重ね、執筆者を厳選し、フォーマットを決め、推敲に推敲を重ねてできた・・・」訳では全然なく、「とりあえず、走り出して、それから考えよう」スタイルでできた、どちらかといえば、体育会系のノリで作られた。「ごちゃごちゃ考える暇があるんやったら、原稿集めよう、資料書こうぜ」というわけだ。走り出すと、表紙のデザインを申し出る奇抜な人が現れたり、「地域本部から」のように自らのコーナーに、自らフォーマットを揃えて「白浪五人男」のようにビシッと揃い踏みしたり、事務局の若手たちがかなりの労力を割いて5年間の金属部会の行事を洗い出してくれたり、それを一覧にまとめる猛者がすごい。絶対に小生なら真似できないことをしてくれた。そして校正の鬼軍曹たちが「技術コーナー」の論文をびしびし鍛えて、フォーマットまで揃えたり、いろんなことを、

関係者が自ら行ってくれた。全国の部会員のノリも最高だった。「100文字お便り」を募るとあっという間に30人から返信があり、「論文打診」では予想を上回る参加率だった。圧巻だったのは「顧問からの一言」コーナー。自ら世話役を申し出ていただいた先輩が、きっちり期限内に揃えて提出。その内容が、各々の顧問の思いと工夫がこもり、読んでいて面白い。▶この冊子は、すべての部会員の協力がなければできなかった。6月に言い出して、7月にキックオフ行い、10月はじめにはほぼ完成していた。部会長の提案を実際に行ってくれる幹事もすごいし、それを見守る顧問もさすが、そして全国に散らばったノリの良い皆さんのおかげだ。でも、一つだけ言わせていただければ、正直、いいだす時、不安で仕方なかった。皆が賛同してくれるだろうか、負荷になることを、さらに増やすだけではないのか。セミナーや定例や全国大会や合同や見学会や勉強会やら、試験問題見直しやらで数十回拘束した上、さらにこの冊子なんて不可能ではないかと弱気になっていた。しかし、それを救ってくれたのは金属部会執行部のメンバで、「いいんじゃないですか」「やりましょう」と賛同してくれたことだ。中でも、執行部に有識者で入ってくれている元理事や元部会長も「やろうぜ」と言ってくれ、踏ん切りがついた。あの後押しがなければ、この冊子は存在しなかった。忙しいからといってやらなくても、忙しいがやっても一年は同じように過ぎていく。しかし、一年後には冊子が存在するかしないかが分かれる。こういう貴重な経験を積まさせてもらった。来年？さあ、それは来年のお楽しみに。でもこのまま終わるようなら金属部会の活動ではない。また一年後、部会長便りで報告する。「この冊子はゴールではない」、という一言だけは伝えておきます。ちゃんちゃん。

## 4 和鐵管見 29

▶これまで、いい加減、ドタバタ人生を歩んできたが、2024年1月は、和鐵史上、最も激動の月だったと言えるかもしれない。まず、最初に、映画の話からすると、1月の封切りは1本だけ。「ゴジラ-1.0/C」これはすごかった。何がすごいかといえば、白黒映画なのだ。色がなくなることで印象がガラリと変わり、恐怖感は5割増し、1回目で見えなかったディテールが鮮やかに目に飛び込んでくる。情報は少ない方が伝わりやすい、というのは伝達の王道だが、映画館で体験するとは思わなかった。▶この映画は、神奈川県海老名のイオンシネマで見た。和鐵は、この地で今月10日から、フルタイムの企業内技術士になった。月金で朝から夜までびっしり現場で働いている。もちろん作業をしている訳ではない。しかし、歩き回り、観察し、背丈よりも高い鋳物や船のような構造物が、真っ赤に焼けて炉から登場し、それを水槽にジャブんと浸漬するのを目を輝かせて観察している。やっぱり現場はいい。技術指導や顧問も面白かったが、現場で若い担当と侃侃諤諤と議論し、熱電対を引っこ抜いて観察するのは最高だ。▶一月の初めはマレーシアに住んでいた。12月の役員会が終わったその足で、ベトナム経由でクアラルンプールに行き、コンドミニウムの19階に住み着いた。と言っても2週間しかいなかったが。暖かいここで執筆三昧だった。次に出す「脱炭素社会」は脱稿した。2月の出版に向けて出版社が動いている。さらに「技術者倫理のジツム」もノリノリで執筆した。誰も知り合いがない場所で、会議も提出書類にも煩わされず電話もかかってこず、テレビも映らない場所で最高だった。まあ小生が暖かいところにいるのを聞きつけて年末にやってきて付き合ったことと、あまりにもどこにも行かないので、ちょっとまずいかと思い直し、電車を乗り継いで

ヒンズー教の寺院に遊びに行ったことぐらいで、あとは執筆。これもまた性に合っている。で、9日に帰国して10日から着のみ着のみで社まで出社して（まあ、背広だけは自宅にとりに行ったが）そのまま、会社の用意していた部屋ですっと過ごしていた。▶着のみ着のみとは、上はTシャツを3枚重ね着し、ズボンの下は、短パンが3枚。海外に格安航空で行くには、飛行機持ち込み荷物の重量が5キロ以内なので衣類はすべて着用して着膨れ状態で飛行機に乗る。5キロといえば、パソコンとモニターとケーブルとレンタルWIFIでギリギリ。歯磨きも髭剃りも何も持たないでいくことになる。数千円払えばいいだけなのだが無駄な出費が嫌いな性格では仕方ない。▶マレーシアでは、移住して仕事をしている技術士と連絡が取れた。年中暖かいところで、その人も雑誌原稿と執筆だけで暮らしている。それを知った時、一瞬だけだが「こんな生活もあるのか」と現場復帰を後悔仕掛けた。よく考えるとコロナでWEB化が進み、どこに住んでいるのかはあまり関係なくなった。実際、年初の金属部会の二十数人集まった幹事会はWEBで違和感なく行えた。今回はここまで。